横浜市立 下瀬谷中学校　　学校評価報告書　　（ 令和 4 ～ 6 年度 ）

重点取組分野	令和 4 年度 具体的取組	令和 4 年度 自己評価結果	総括
確かな学力	①授業のユニバーサルデザイン化を図り、「全員参加、分かる授業」を実践する。②校内授業研修や小中一貫ブロック授業研修を通し、授業力向上を図る。③学習状況調査の結果分析を授業改善に生かす。④新学習指導要領に対応した授業提案を行う。⑤TT授業を実践し、基礎学力の定着を図る。	「全員が参加」「分かる」授業を目指し、研修し、授業改善に取り組んだ。今年度は評価に関する研修を複数回実施し、新学習指導要領での指導と評価について職員の理解を深めた。また、次年度の学習評価の算出方法について研修会を実施し、職員間の情報共有を行うことができた。	B
豊かな心	①生徒会活動や行事などを通して、本校「基本精神」に基づき生徒を育成する。 ②道徳の授業をユニバーサルデザイン化し、分かる道徳を実践する。	①基本精神と今年度からスタートしたESDロジックの関係を明確にし、それに基づいて生徒の活動を支援する意識の向上が図れた。 ②各学年の発達段階においてユニバーサルデザイン化を工夫し、分かる道徳の授業実践に努めた。	B
健やかな体	①食教育を通して健康の大切さを理解させる。 ②たくましい心身を育成するために、授業や行事等を充実し体力向上を図る。 ③規則正しい生活態度を育てるために、授業を通して生活習慣について学習させる。	①食教育では、外部講師の講演会などを通して食や健康の大切さを伝えた。今後は、より各教科を通して食や健康の大切さを教えていきたい。 ②体育祭の練習や保健体育の授業を通して体力向上を図った。来年度以降は、それ以外でも向上を図れるように検討していきたい。 ③外部講師による睡眠についての講演や保健体育	B
ESD	①研修等を通して、全職員でESDの理念を共有する。 ②学年や学級経営計画等をESDの視点で整理して作成する。 ③ESDの推進をしていくために、できることから実践し検証・改善を繰り返していく。	①研修を通じて、基本的なESDの考え方を共有することができた。 ②③各分掌でESDの視点で計画を整理することができた。しかいし、実践における改善・反省までには至らなかった。	C
いじめへの対応	①生徒一人ひとりに寄り添い、受容的・相談的生徒理解と指導・支援を実践する。②生徒一人ひとりに自己有用感を持たせる取り組みを実施する。③教師自ら研鑽を重ね、いのちの大切さや尊さを教えていく。④組織として情報を共有し、全職員で取り組んでいく。	いじめ防止対策委員会の運営について、いじめの可能性がある段階で情報共有を行い、組織的に対応を行った。生徒のアンケートをもとに、各クラスで結果の考察を行い、各学年と個別級でいじめ解決アクションプランを作成した。	A
人材育成・組織運営(働き方)	学び続ける職員集団を目指し、①メンターチーム会②ミドルリーダー会③下瀬谷中を支える会を発足、全職員が①～③に在籍する。各会のテーマに沿って、年間を通じて研修を継続的に実施する。①は授業力の向上、②は発信力の向上、③はマネジメント力の向上を念頭に置いて補完しあいながら研鑽を積むこととする。	「メンター」「ミドル」「支える会」について呼び名も定着してきた。今までの研修の持ち方と違い、ミドルリーダーからの発信が増えた。まだまだ発展途上だが、フォームを継続することで、最終的な目標の「学び続ける職員集団」へ近づいていくと思える年間の活動であった。	B
児童生徒指導	①生徒に寄り添った指導の充実を図り、特別支援教育を含め、組織的な支援を行っていく。 ②誰もが安心して過ごせる学校生活を目指し、グローバルな視点をもち、教育相談などの相談活動を充実させる。 ③保護者との連携を深め、情報の共有化を図る。また、地域と協働する中で、地域に貢献する姿勢を身につける。	生徒に寄り添った指導の充実に向け、一人の生徒に複数の教員で関わり、組織的な支援を行った。誰でも安心して過ごせる学校生活を目指し、相談活動を充実させた。生徒には、行事だけでなく、普段の学校生活の中で「地域の一員」として生活しているという意識を持たせることができた。	B
特別活動	①生徒一人ひとりが達成感を持てるような自治的活動の実施に努める。 ②朝会や総会、各行事の運営を生徒自らが行う体験的な場面の充実を図る。 ③生徒自らに「自分たちで自分たちの学校を良くしていこう」という意識を持たせる。	SDGsと関連させた下瀬谷中学校の基本精神を軸に、生徒一人ひとりが達成感を持てるような自治活動に努めた。また、行事の企画や運営などを生徒自らが活動できる場として充実させることができた。委員会活動を中心として、下瀬谷中学校をよりよくしていくという意識を持たせることができた。	B
特別支援教育	①特別支援教育委員会の定期開催を内容の充実を図る。②各学級で個別の指導計画を作成する。 ③特別支援教育（学習支援）の充実のため、時間割内に担当者を決め、全職員で対応する。 ④関係機関と連絡を密に取りながら、丁寧な支援に努める。	特別支援教室の今後の運営方針や参加生徒の確認、特別支援についての研修など充実した取組ができた。個別の教育支援計画の引継ぎ、作成など意識を高められるよう啓発活動をし、作成を確実に行った。特別支援教室の支援員との情報共有をノートを使用し密にすることができた。専任との情報共有を密にし、スムーズに関係機関との連携を図ることができた。	B
地域連携	①職員・生徒が地域行事に積極的に参加し、地域連携を深める。②保護者や地域と連携した「下中生が安心して過ごせる学校づくり（SAS）」を実践する。③学区内の各地域に分かれ、地域清掃を実施する。④小学校・中学校・地域との合同防災訓練を実施する。	今年度は、地域清掃と小・中・地域での合同防災訓練を行うことができた。活動に取り組むことで、生徒自身が地域で生活している実感を持つことができた。教職員も地域と交流し、連携を深めることができた。SASの会の活動については、社会情勢を見ながら検討していきたい。	B
ブロック内評価後の気付き	小中合同授業研を通して「ICTの活用」について小中で共通理解を図ることができた。学習等に使用することに児童生徒も教職員も慣れてきている様子が感じられた。今後は、情報に関する基本的な技能やモラルが段階を追って確実に定着するように、小中9年間の計画を考えて実行していく必要性を感じた。児童生徒交流日や部活動体験、地域防災などで児童生徒の関わりがあり、児童にとって安心して進学を考えることにつながっている。コロナ禍で実践できていない小中全職員での協議をもとに、小学校と連携して「自分づくりに関する力」について小学校と連携して9年間で育成していきたい。		
学校関係者評価	・コロナ禍ではあったが、地域清掃や防災訓練を学校と地域と連携して実施することができた。 ・学校行事にも保護者、地域と参加する機会がコロナ以前のような状態に戻りつつあり、学校の様子を見ることができた。 ・ESDの推進に向けて、具体的な取り組みに期待している。		
中期取組目標振り返り	・新学習指導要領の全面実施を受けて、また、今年度本校が創立40周年を迎えたことを機に、学校教育目標を「未来を創造する人を育てます」に改定して、ホールスクール・アプローチで目標達成に向けたベクトルを揃え、新たな学校づくりをスタートさせる年となった。 ・カリ・マネの柱にESDの推進を打ち出し、教育目標を達成させる重要な手段となるよう、教職員の理解を深めることに注力し、研修や視察等を実施した。同時に、教職員の当事者意識を高めるための仕掛けを工夫したことで、今後の教育活動において実践、発展させていくきっかけを得た。		

重点取組分野	令和 5 年度 具体的取組	令和 5 年度 自己評価結果	総括
確かな学力	①授業のユニバーサルデザイン化を図り、「全員参加、分かる授業」を実践する。②校内授業研修や小中一貫ブロック授業研修を通し、授業力向上を図る。③学習状況調査の結果分析を授業改善に生かす。④新学習指導要領に対応した授業提案を行う。⑤TT授業を実践し、基礎学力の定着を図る。	学習状況調査の学力の項目に関して、過去10年と同様に市平均に届かないものであった。その一方で「学習意識」項目については令和2年以降、改善の傾向が見られたため、今後も「全員が参加」「分かる」授業実践に努めるとともに、次の段階として「習得」にフォーカスした授業展開・手立てについて考えていく必要がある。	B
豊かな心	①生徒会活動や行事などを通して、ESDロジックと結びついている「基本方針」に基づき生徒を育成する。 ②引き続き道徳授業のユニバーサル化を意識して、全校で取り組む。	①生徒会活動や各学年行事などの目的やねらいをESDロジックと結びついている「基本方針」と関連づけて生徒を育成することができた。 ②各学年で指導案やワークシートの段階でユニバーサルデザイン化を工夫して授業実践に努めた。課題は、豊かな心をさらに醸成するために「個別最適な学び」と「協働的な学び」のあり方について考えていく必要がある。	B
健やかな体	①家庭科や保健体育を含むいろいろな教科で、食教育や健康の大切さを生徒に教える。 ②たくましい心身を育成するために、体育祭や保健体育以外でも体力向上を図る。 ③規則正しい生活態度を育てるために、授業や外部講師による講演などいろいろな方法を使って生徒に生活習慣について学習させる。	①食教育では、外部講師の講演会などを通して食や健康の大切さを伝えた。今後は、より各教科を通して食や健康の大切さを教えていきたい。 ②体育祭の練習や保健体育の授業を通して体力向上を図った。来年度以降は、それ以外でも向上を図れるように検討していきたい。 ③規則正しい生活について、睡眠についてはSNS等	B
ESD	①ESD推進担当の組織が立ち上り、担当職員を中心として学校全体にESDの理念を浸透させる。 ②3年間を見通した（発達段階に応じた）ESD教育を展開できるように、総合学習の計画・立案を練る。 ③引き続き、身近なところから取り組めるように、学年・学級でESDロジックを作成する。	①担当教員らで視察研修してきた内容を、職員会議等で共有することができたが、ESDの理念を浸透させるまでには至らなかったかのように思う。 ②3年間を見据えた総合的な学習の時間の計画を作成し、それに伴い、修学旅行の見直しも行うことができた。	B
いじめへの対応	①生徒一人ひとりに寄り添い、受容的・相談的生徒理解と指導・支援を実践する。②生徒一人ひとりに自己有用感を持たせる取り組みを実施する。③教師自ら研鑽を重ね、いのちの大切さや尊さを教えていく。④組織として情報を共有し、積極的ないじめの認知と解消に全職員で取り組んでいく。	いじめの可能性がある段階で情報共有を行い、積極的ないじめ認知と組織的な対応を行った。対応に際して、生徒一人ひとりに寄り添い、本人やご家庭の意向を大切にして指導にあたった。職員研修を定期的に行い、受容的・相談的生徒理解と指導・支援について研鑽を積んだ。	A
人材育成・組織運営(働き方)	引き続き「学び続ける職員集団」に向け、取組を継続する。特にメンターチームの学びが推進されるよう、研究授業等の仕組みを変更し、参加する多くの職員の学びに繋がるようにする。 経験年数が近いグループを構成し、悩みや課題、学校運営への参画度などが近いことを生かし、同僚性を高める。グループ間の補完性も大切にしたい。	ミドルリーダーを中心とした、職員研修を積極的に行うことができた。メンターチームに所属する職員に対してもよい刺激になり、それぞれの成長につなげてくれることを期待している。各チームの座談会でも前向きな意見が多く、職員の連携が深まっていることを実感している。	B
児童生徒指導	①生徒に寄り添った指導の充実を図り、相談活動を充実させるとともに、特別支援教育を含め、組織的な支援を行っていく。②誰もが安心して過ごせる学校生活を目指し、グローバルな視点をもち、多様性を認め合う姿勢を養っていく。③保護者との連携を深め、情報の共有化を図る。また、地域と協働する中で、地域に貢献する姿勢を身につける。	①生徒の実態把握と関係構築を大切にし、傾聴の姿勢で相談活動を行うことができた。また、情報共有を密にし、組織的な支援を行うことができた。②他者の考えを尊重し、認め合う雰囲気づくりを、各学級・授業で行うことができた。③保護者との情報共有を丁寧に行い、良好な関係づくりを行うことができた。また、夏祭りや地域清掃といった行事に参加し、地域に貢献する姿勢を養うことができた。	B
特別活動	①生徒一人ひとりが達成感を持てるような自治的な活動の幅を広げていけるようにする。 ②生徒会活動や学級活動での運営を、生徒自らが行う体験的な場面として充実をさせていく。 ③生徒自らに、「自分たちで自分たちの学校を良くしていこう」という意識を持たせる。 ④全ての活動を通して、基本精神や学校教育目標を意識できるように努める。	行事の企画や運営などを生徒自らが活動できる場として充実させることができた。また、SDGsと関連させた本校の基本精神のもと、委員会活動や委員会再編成案の検討を通して自校をよりよくしていくという意識を持たせることができた。	B
特別支援教育	①特別支援教育委員会の研修内容の充実を図る。②個別の支援が必要な生徒に個別の指導計画を作成する。 ③特別支援教室の支援の充実を図るための体制をつくり、担当を決め、全職員で対応する。 ④関係機関と連絡を密に取りながら、丁寧な支援に努める。	①センター的機能を活用し、特別支援学校の個別の指導計画の作成の仕方を全体にレクチャーできた。②個別支援教育計画・指導計画の存在や資料の作成への取組の意識を高めた。③特別支援教室（登校支援）を開始し、体制を整えた。④専任や特別支援COを通して様々な外部機関と連携し、学校だけでなく支援の輪を広げることができた。	B
地域連携	①職員・生徒が地域行事に積極的に参加し、地域連携を深める。②保護者や地域と連携した「下中生が安心して過ごせる学校づくり（SAS）」を実践する。③学区内の各地域に分かれ、地域清掃を実施する。④小学校・中学校・地域との合同防災訓練を実施する。⑤地域・学校協働本部の活動を充実させ、地域の資源を活かした教育活動を行う。	今年度は、学・家・地事業をコロナ前と同様に実施したり、PTAとの連携で学校行事のサポートをして頂いたりし、生徒の健全育成のために保護者・地域から多くの協力を得ることができた。地域・学校協働本部の活動連携については、具体的な取り組み内容を増やし、一層の連携を図っていきたい。	A
ブロック内評価後の気付き	・小中ブロック合同での研修会や研究会を通して、職員同士の意見交換などが活発に行えた。以前からブロックの児童生徒が抱えている課題について、共通理解を深めることができた。 ・特別支援教育の充実や登校支援のニーズは年々、高まっている。すべてのことに対応することは難しいが、9年間で支援できることについて知恵を出し合い、模索していきたい。		
学校関係者評価	・大人、子ども、地域でESDのマインドを共有することが大切である。 ・アンケートによる評価だけではなく、実際に子どもと対話をして、肌感覚で確かめていくことも大切である。 ・子どもも保護者も安心できる学校になっていることは間違いないが、子どもの学の向上については依然として課題が残る。そこも是非、頑張っていただきたい。		
中期取組目標振り返り	ESDの推進を掲げて2年目を迎え、少しずつ生徒や職員の意識の高まりを感じるようになってきた。今あるものを発展させ、持続可能な取り組みへと変化させていく姿勢が見られるようになった。今後の課題として、ESDの目標である「持続可能な未来や社会の構築のために行動できる人の育成」のため、地域や企業とどのような協働ができるのか考えていきたい。		

重点取組分野	令和 6 年度 具体的取組	令和 6 年度 自己評価結果	総括
確かな学力	①授業のユニバーサルデザイン化を図り、「全員参加、分かる授業」を実践する。②校内授業研修や小中一貫ブロック授業研修を通し、授業力向上を図る。③学習状況調査の結果分析を授業改善に生かす。④新学習指導要領に対応した授業提案を行う。⑤TT授業を実践し、基礎学力の定着を図る。		
豊かな心	①生徒会活動や行事などを通して、ESDロジックと結びついている「基本方針」に基づき生徒を育成する。 ②引き続き道徳授業のユニバーサル化を意識して、全校で取り組む。		
健やかな体	①家庭科や保健体育を含むいろいろな教科で、食教育や健康の大切さを生徒に教える。 ②たくましい心身を育成するために、体育祭や保健体育以外でも体力向上を図る。 ③規則正しい生活態度を育てるために、授業や外部講師による講演などいろいろな方法を使って生徒に生活習慣について学習させる。		
ESD	①担当職員を中心として学校全体にESDの理念を浸透させる。 ②3年間を見通した（発達段階に応じた）ESD教育を展開できるように、総合学習の計画・立案を練る。 ③引き続き、身近なところから取り組めるように、学年・学級でESDロジックを作成する。		
いじめへの対応	①生徒一人ひとりに寄り添い、受容的・相談的生徒理解と指導・支援を実践する。②生徒一人ひとりに自己有用感を持たせる取り組みを実施する。③教師自ら研鑽を重ね、いのちの大切さや尊さを教えていく。④組織として情報を共有し、積極的ないじめの認知と解消に全職員で取り組んでいく。		
人材育成・組織運営(働き方)	引き続き「学び続ける職員集団」に向け、取組を継続する。ミドルリーダーを中心とした研修会を設定し、参加する多くの職員の学びに繋がるようにする。 経験年数が近いグループを構成し、悩みや課題、学校運営への参画度などが近いことを生かし、同僚性を高める。グループ間の補完性も大切にしたい。		
児童生徒指導	①生徒に寄り添った指導の充実を図り、相談活動を充実させるとともに、特別支援教育を含め、組織的な支援を行っていく。②誰もが安心して過ごせる学校生活を目指し、グローバルな視点をもち、多様性を認め合う姿勢を養っていく。③保護者との連携を深め、情報の共有化を図る。また、地域と協働する中で、地域に貢献する姿勢を身につける。		
特別活動	①生徒一人ひとりが達成感を持てるような自治的な活動の幅を広げていけるようにする。 ②生徒会活動や学級活動での運営を、生徒自らが行う体験的な場面として充実をさせていく。 ③生徒自らに、「自分たちで自分たちの学校を良くしていこう」という意識を持たせる。 ④全ての活動を通して、基本精神や学校教育目標を意識できるように努める。		
特別支援教育	①特別支援教育委員会の研修内容の充実を図る。②個別の支援が必要な生徒に個別の指導計画を作成する。 ③特別支援教室の支援の充実を図るための体制をつくり、担当を決め、全職員で対応する。 ④関係機関と連絡を密に取りながら、丁寧な支援に努める。 ⑤校内ハートフルの活用を進めていく。		
地域連携	①職員・生徒が地域行事に積極的に参加し、地域連携を深める。②保護者や地域と連携した「下中生が安心して過ごせる学校づくり（SAS）」を実践する。③学区内の各地域に分かれ、地域清掃を実施する。④小学校・中学校・地域との合同防災訓練を実施する。⑤ホームページや学校だよりなどを通じて、地域への情報発信をしていく。		
ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			